
緋弾のARIA ~ 無音の狙撃手 ~

ドリル男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のARIA〜無音の狙撃手〜

【Nコード】

N1648BA

【作者名】

ドリル男爵

【あらすじ】

東京武偵高校、武力を行使できる探偵である武偵を育成するその高校に転校してきた東郷忠一は、過去に引き起こした事件から銃の引き金を引けなくなっていた。

緊急時にも銃器を使わず、ただ傍観か近接戦闘での対応のみを決め込み、所属するアサルトの授業にも出席しない彼を、いつしか学校の人間はチキン（臆病者）と揶揄するようになっていた。

そんな言葉も全く気にすることなく、定位置である屋上でぼんやりと空を眺めていた時、彼は狙撃科に所属するSランク狙撃手レキと出会う。

その時、まだ彼は知らなかった。

このレキという名の少女が、ただ過ごすだけの毎日を変えるきっかけになる事を。

注意

- ・冒頭から残酷な描写が含まれます、苦手な方は見ない方がいいです。
 - ・この小説は緋弾のアリアの二次創作で、戦闘描写の練習したいけどまた新しく設定考えて小説書くのが面倒くさい作者のわがままで生まれた小説です。
- なので更新頻度はかなり遅いです。

序 『無音の狙撃手』

暗くぼんやりとした輪郭を持つ世界、背景の黒の上に緑や赤といった温度で色分けされた色彩が映し出されるそれが、サーモスコープから送りだされてくる標的の体温だと認識する頃には、照準線の中に彼、もしくは彼女の頭部を捉えていた。

それから手にする特殊用途狙撃銃、そのスコープと一体化した視線を左右に移動させてみると、様々な武装が施された男たちの存在が明るみになった。

恐らくは中国かその辺からの輸入品であろうカラシニコフ小銃のデッドコピー版を基本とし、一世代前の主力車両ならば一撃で走行不能に陥れられるであろうRPG-7対戦車ロケット砲やSV-98狙撃銃を携える多国籍の人間およそ三十人で構成された彼らは、今まさに行軍を行おうとせんと隊列をなしていた。

その構造の簡素さと、部品と部品のクリアランス（隙間）を大きく取ることによってどんな劣悪な環境でも故障しにくく、低い工業能力でも生産できるカラシニコフ小銃をはじめとする彼らの装備は、テロリストの兵器とあだ名される物ばかりで埋め尽くされていた。

そういった軍勢をサーモスコープでくまなく確認した一人の男は、手には旧ソ連軍が開発した特殊用途狙撃銃ヴィントレスの特異なフオルムを浮かび上げらせ、プローン（伏射）の姿勢をとって静かに息を殺していた。

AKにRPG-7を装備した強武装の軍勢が、少なくとも装備だけは骨のある奴ばかりが揃っているな。

整列する小隊を目の前にして、狙撃姿勢を保ったままで舌舐めずりした男は、首に巻きつけられた骨伝導マイクに声を吹きこむ為に、数時間は震わせていない声帯に力を込める。

(識別番号01、目標の小隊を発見。武装はAKにRPG-7にS
V-98狙撃銃。指示を待つ)

何時間もの間、極寒の中に身を置きながら無言で狙撃姿勢をとっていた事と、およそ四百メートル先に作戦会議で説明された狙撃目標の小隊がいる事、その二つの要因が相まって、骨伝導マイクに吹きこまれた声は思った以上に低くしわがれた物になっていた。

だが、そんなしわがれた声でも、彼と同じく骨伝導マイクを首に巻き、然るべき武装を整えて周辺に展開しているであろう仲間達には十分だったらしい。

(指揮官より識別番号01へ、目標の小隊をこちらでも確認。既に周囲への特殊部隊の配置は終了した。後はいつも通りの手法で特殊部隊の突入を開始する)

その名の通り空気ではなく人体内部の骨を振動させることで音を聴覚に伝える骨伝導マイクは、周囲に音を全く漏らさずプローンでの照準を続ける男に仲間達の意図を伝えてきた。

体内の骨を密かに振動させたその声を聞いた男は、先程よりも一層

集中して一番初めにサーモスコープ越しに視認した大男に再び照準を合わせた。

小隊の先頭に立ち、構成員達に何か語りかけているといった様子の
大男は、小隊の指揮官であり、今は演説が何かで部隊の士気を高めて
いる最中だろう。

カラシニコフライフルに長射程の狙撃銃、終いには対戦車ロケット
砲で武装した小隊。

彼らがどれだけの訓練を受けているかどうかは推測するしかなかつ
たが、少なくとも武装は通常の軍隊と大差ない装備だ。

戦闘訓練が付け焼刃程度だったとしても、彼らが“目標施設”への
侵攻を果たすことができれば、近隣住民はおろか、この極寒の大地
に位置する国家の根幹をも揺るがす事態へと発展する。

現在、小隊が保有している山中のアジト、そこからしばらく進んだ
場所に位置する軍事格納庫、そこにある物の名称も危険性も十二分
に理解していた男は、目が痛くなるようなサーモスコープの照準線
の中心から少し下に、防寒着に包まれていないせい、他の部位よ
りも低い温度で表示されている頭部を持つてくる。

自分の報告に応答してきた指揮官、たぶん“大佐”が伝えてきたい
つも通りの手法。

自分の初弾での狙撃成功を合図に特殊部隊を突入させる手法。

それを脳裏に描いた男はVSS狙撃銃のトリガーを遊びが無くなる
まで引く。

照準した大男が演説の最後に手にしたカラシニコフライフルを掲げた瞬間、手ブレを抑える為に息を止めていた男は、遊びが完全に消えていたVSSの引き金を一息に絞った。

今まで眠っていた撃針が9×39mm弾の雷管を叩き、叩かれた雷管が銃弾内の発射薬を燃焼させ高压ガスを発生させると、その凄まじい圧力にさらされた大口径の弾頭は銃身内を音速に近い速度で突き進む。

序 『無音の狙撃手』

銃身内蔵式の高性能なサプレッサー（減音器）が発射の際に発生した燃焼ガスを細かな穴から徐々に拡散することで銃器特有の甲高い破裂音が消された事と、VSS専用に開発された9×39mm弾の銃口初速が音速を超えず衝撃波を発生させない事、二つの要因が重なって銃口を出たSP-6、すなわち9×39mm徹甲弾の弾頭は、僅かなボルトの作動音と排莢音を残しマズルフラッシュを出すこと無く外気へと躍り出た。

その後も二回ボルトの作動音が響き渡り、三点バーストで射撃された三発の大口徑弾は、空を切り裂き、黒々とした夜の帳を猛然と飛翔する。

男から照準された大男までの距離はおよそ四百メートル、通常のボルトアクション狙撃銃ならば射手が十分な訓練を受けていれば命中が期待できる距離だ。

だが、男の持つVSS狙撃銃は他のボルトアクション狙撃銃と違い近・中距離での戦闘に威力を発揮する銃であり、四百メートルの距離では命中させるには精度的に少々問題が出てくる距離だった。

それにVSS狙撃銃に使用されている専用弾薬9×39mm弾は、その弾頭の重さから、軌跡が軽く放物線を描く傾向があり、これは照準の難易度を上げる助けとなっている。

三点バーストで射撃された事もあり、射出された三発のうちどれかが命中すれば幸運、一般的な射手ならばそう考えるに違いないし、そもそも、よほど隠密に動かなければいけない時以外、VSSなん

て持ち出そうとはしないだろう。

しかし、冷たい地面に身を置いているこの男はそういった一般的な射手とは違う。

四百メートル先の目標を狂いなく打ち抜ける射手はざらにはいるが、四百メートル先の三十センチの円の中に連続して着弾させる事が可能な射手はそういない。

VSS狙撃銃の引き金を絞った彼は、後者に該当する射手だった。

軽い放物線を描いて瞬く間に狙撃対象の大男との距離を詰めた銃弾の束は、全くぶれること無く彼の首と頬とこめかみに殺到した。

弾頭の重量からボディーマーやケプラー繊維すら貫く事ができる程のその銃弾は、途方もないその運動エネルギーを捌け口を大男に定め、非防弾対象である肉体を貫き、体内へと進行する。

ライフルリングにより螺旋回転がかけられたそれは、筋組織をむちやくちやに引き裂き、復元不能なほどの銃創を生み出す。

それだけでは銃弾のエネルギーを完全に消費することが出来なかつたらしく、更にその身を突き進めた銃弾は頸椎、頬骨、頭蓋骨が碎けるくぐもった音を小隊が集まるアジトの更地に体現させた。

首の神経をずたずたに引き裂き、脳細胞の内部を突き進む三発の弾頭は、この時点で大男の生命活動を停止させるには十分な働きを見せていた。

しかしながら、それだけではまだ貫通力の高い9×39mm弾の勢

いは消えず、反対側の皮膚を破いて虚空に飛び出した銃弾は、脳漿と血液の混じったどす黒い液体と共に、再び虚空へと飛び出していた。

突如として飛来した三発の銃弾、それにより右側頭部と首の後方の大部分を失った大男は、生命を失うと共に身体の統制を失い、糸の切れた操り人形のように仰向けに倒れ込んだ。

（突入！！、残党狩りだ！！）

それと同時になだれ込んだ特殊部隊、数十名の精鋭集団の持つAK-74アサルトライフルの連射とAN-94アバカンの高速二点バーストによる射撃が、頭を失った小隊の全面に展開される。

それをサーモスコープで確認した男は、その場に静かに立ちあがると、急に鬱蒼と茂る密林の中を腰を低くして走り始めた。

圧倒的な遠距離から狙撃できるボルトアクション狙撃銃なら、相手の狙撃手と周囲さえ警戒していればその場にとどまって狙撃することができるとが。

何故なら、焦る相手が引き金を絞るアサルトライフルやサブマシンガンでは精度や射程の問題から、遠距離に陣取る狙撃手には命中が望めないからだ。

だが、男のVSS狙撃銃でまともに狙える距離は、たかだか三百から四百メートルが限界だ。

もし、相手が彼を発見してしまえば、即座に音速を超えるカラシニコファイフルの銃弾とRPG-7のロケット弾が殺到する事だろう。それを防ぐための防護策が、一人狙撃したら即座に場所を変え、別の地点から狙撃を行う方法だ。

事前に周囲の地形を把握しておく必要性はあるが、この方法をとれば射程が短いVSSでも反撃を受ける可能性を減らす事ができ、射撃音が少なくマズルフラッシュが発生しないVSSでの隠密性を大きく高めることができる。

序 『無音の狙撃手』

二年前に入隊したこの部隊で初めて握ったVSS狙撃銃、その日から今日まで多くの人間と戦い、殺害しててきた上での最高の運用方法が、狙撃地点を即座に変えるゲリラ戦法だった。

連続した銃声が響き渡る中、針葉樹林が連続して生える林、それに守られた高台を第二の狙撃地点に選んだ彼は、相手の狙撃手からは死角となる木々の陰で一度息を整える。

それからスコープを覗き、今度はスタンディング（立射）の体制で浮足立つ小隊の兵士に照準を合わせた彼は再び大口径弾を三点バーストで二回撃ち放った。

寸分の狂いなく一瞬で目的地点に到達した大口径弾は、敵の小隊の中でも男に対する最も大きな脅威となっているSV-98狙撃銃を持った二人の兵士の頭蓋を打ち砕く。

指揮官を失うと同時に奇襲をかけられた事で完璧に浮足立った敵部隊、彼らは果敢に反撃する暇も無く、なだれ込んだ特殊部隊の弾幕と、闇に溶け込んだ特殊用途狙撃銃により、一人、また一人とその人数を減らしてゆく。

もう残り一発しか装填されていない弾倉を躊躇いも無く外し、ケブラー製防弾チョッキの胸ポケットから新たな弾倉をVSSに装填した男は、物影に身を潜めながらコッキングレバーを引く。

初弾を装填したVSSを再び正面で構えた男は、ひとまずは攻撃を受けている敵部隊の状況を把握する為に、物陰からサーモスコープ

に目を通した。

先程の狙撃により、ボルトアクション狙撃銃を携えたスナイパーの生体反応は消えていた。

残る敵はオートマチックのカラシニコフライフルとRPG-7を携行した歩兵のみだが、これは味方部隊の奇襲攻撃によりその大半が胸や頭から熱い血液を噴出させ、戦闘能力と生命の両方を奪われ無力化されていた。

指揮官を狙撃され、突発的な特殊部隊の攻撃に反応できず、ただ茫然と立ち尽くした所で頭部に銃弾を受けて倒れる者。

恐怖に心を支配され、手にした自動小銃を無茶苦茶に乱射し、結果的に味方の四股を撃ち抜いてしまった者。

ものの数分で殆ど制圧されてしまった小隊、彼らの死にざまを無言で脳裏に思い浮かべた男は、せめて早く楽にしてやろうと、残る敵兵士へと照準を合わせようとする。

その過程で、彼は視野の右端、恐らくは敵小隊の武器庫の役割を成しているコンクリート製の倉庫に異変を感じ、照準線の中心をその建物の入口に移動させる。

スコープと一体化した視線が見た物、研ぎ澄まされた狙撃手の神経が危険信号を送っていたそれは、倉庫の戸口に立つ一人の敵兵士の姿だった。

その兵士の負傷の有無や、どんな表情を浮かべているかは体温を感じ知して視覚化するサーモスコープの映像では見ることは出来なかつ

だが、恐らくは身体を味方、又は自分の血で濡らし、激昂と恐怖が入り混じった表情で立ち尽くしていた事だろう。

無機質な温度表示に変換された兵士が構えるRPG-7対戦車ロケット砲、その照準は明らかにアジトの正面玄関の手前からスリーマンセルで進行する特殊部隊要員へと向けられていた。

まずいと考える暇も無く、殆ど反射的に動かされた腕が、VSSの銃口をRPGを構える兵士の頭部へと持っていたが、即時撃発可能なそれが三点バーストの銃弾を射出する事は無かった。

何故なら、倉庫の戸口から少し右にずれた敵兵士、まるで誇示するかのように移動した彼の後方に、壁かドラム缶か何かに背を預ける一人の人間の姿が視認出来たからだ。

敵の小隊の構成員とは違い、ケブラー製防弾チョッキや編み上げのブーツなどの徹底した戦闘用装備に身を包み、負傷しているのかその場から動かず大きく肩で息をする人間、今強襲をかけている部隊の象徴であるチタン製のフルフェイスヘルメットを装着する彼が味方だということ判断するには一瞬の思考で済んだ。

倉庫の奥でぐったりと座り込む味方の存在、それをあからさまに見せつけたRPG持ちの敵兵士は、正面のスリーマンセルに警戒しながら元の位置へと戻っていた。

元の位置に戻った敵兵士は、正面のスリーマンセルに細身な対戦車ロケットの弾頭を向け、今にも引き金を引こうと待ち構えているが、既に狙撃体制に入っている男は彼を狙撃するのに戸惑いを感じていなかった。

銃器に金をかけすぎたせい、敵の防弾装備は紙に等しいほど乏しい物だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1648ba/>

緋弾のエリア～無音の狙撃手～

2012年1月6日12時46分発行